Title	「法概念」のための、「概念法学」との闘い：三田法学の道
Sub Title	Struggle for the concept of law against the "conceptional legal school"
Author	倉沢, 康一郎(Kurasawa, Yasuichiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院法務研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶應法学 (Keio law journal). No.11 (2008. 12) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾創立150年記念号上巻 LS入学記念講演会 日時: 平成20年4月2日(水)
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20081225-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「法概念」のための、「概念法学」との闘い

——三田法学の道——

倉澤 康一郎

司会 これより平成20年度法務研究科入学記念講演会を開催いたします。本日は、慶應義塾大学名誉教授倉澤康一郎先生を講師にお招きしております。本日の講演会にあたって、法務研究科委員長の豊泉貫太郎先生よりご挨拶ならびに倉澤先生のご略歴の紹介がございます。

豊泉 豊泉でございます。このたびは、慶應義塾大学大学院法務研究科に入学おめでとうございました。これから2年間または3年間、皆さまが慶應義塾法務研究科の学生として実りある学生生活を送れるように、われわれ教職員一同一生懸命頑張るつもりでありますので、ぜひ皆さまにおかれましても精進のうえ充実した学生生活を送っていただきたいと願っております。

ご存じのとおり、法務研究科、いわゆる法科大学院というのは、新しい法曹養成のための制度としてつくられた学校でございます。ただ、気を付けていただきたいのは、これは決して新司法試験合格のための予備校ではないということです。新しい法曹を養成するためにつくられた学校機関であるということをご理解いただければと思います。ですから、これからの授業の中においても皆さんに「判例はどうなっている、通説はこう言っている、それらを丸のみにせよ、何しろ覚えるように」ということを要求いたしません。通説や判例を鵜呑みにするような法曹をもしここから輩出するとするならば、わが国の司法の進歩はその段階で止まってしまうからであります。

皆さま方も、新しい司法の一翼を担って、少しでもより良い法の理想の実現に向けて努力するというその一員に加わって、役割を果たしていただかなければいけない。そういう法曹として皆さまを育てようというのがこの法科大学院ですので、時として通説に対して問題を提起し、時として判例を否定する、そういうことをそれぞれの教員が魂をもって叫ぶかもしれない。それは皆さまが法を担う新しい人間として一つの力になってくれるであろうと信じてそのような声をあげようというわけですので、それを正しく受け止めていただきたいと考えるわけであります。

では、正しく一歩でも前進するためにはどうしたらいいか。その一番重要なことは、常に原点に立ち戻る、基礎からものを考えるという姿勢が必要であります。そういう意味で、本日慶應義塾大学名誉教授である倉澤先生をお招きして、皆さまにその基本的なところについてお話しいただこうということをお願いしたわけであります。

倉澤先生の略歴を簡単に申し上げれば、昭和7年にお生まれになられまして、昭和33年慶應義塾大学法学部をご卒業されております。ご卒業と同時に慶應義塾大学に残られ、研究者の道を歩まれまして、助手、講師、助教授を経られ、昭和47年に法学部の教授になられた後、平成9年に大学を定年でお辞めになれるまで、長年にわたって研究と教育に携わられた先生でございます。

この間、日本私法学会理事、あるいは、旧司法試験の考査委員等も務められておられますが、先生はご自身の専攻を「商法」であるとおっしゃられます。私が見る限り真の意味で、本当の意味においての商法学者であると言える方だと思います。と申しますのも、商法学者と名乗りながら、実は会社法しかやっていない。さらに会社法の中の一部、機関だけを専門にしていたり、あるいは、株式だけをするだけなのに商法学者と名乗るような先生方も多い中であって、倉澤先生は会社法も手形法も保険法も、商法全般について常から広くその分野について深く研究されているわけであります。ですから、真に商法を研究の対象とされている先生と申し上げてよい。

特に最近の会社法に関してはいろんな論述の中で、ある意味で今日的といい

ますか、場当たりのに本当にそれが理論的に正しいかどうかを問わず、実務的要請の下で立論している、そういう本もたくさん見かけるのでありますが、先生は従来より常に根本から問題を突き詰められご自身の学説を樹立されています。そういう意味からいいますと、まさに商法学を研究され——「究めた」と言うのと怒られると思います、「いまだに自分は究めてない」とおっしゃると思いますので——究めようとされている姿、それが真の商法学者の姿であると思うのであります。

実は、個人的なことを申し上げますと、先生とはもう40年以上前に手形法を習ったときからのお付き合いでございます。それから40年たっても、いまだにその熱情は変わっていないとお見受けするわけです。その先生に今日、今から『「法概念」のための、「概念法学」との闘い——三田法学の道——』という題でお話ししていただきます。三田法学というものには、時に流されない、時流におもねないという姿勢があろうかと思えます。そういう意味で、先生のお姿はまさに三田法学そのものと思えますが、時として我が道を往くということとどまらず、敢えて時流にあらがうという学問的な姿勢をも示されるわけでもあります。これは、慶應義塾の塾風だけによるものなのか、あるいは、ひそかに感じるところでは、敗戦後の立川高校（旧制府立二中）での三多摩壮士の気風が先生の中にあるのかもしれないということも感じております。

皆さんにとって貴重なひとときと思います。どうか静かにお聞きいただければと思います。それでは、先生よろしく願います。

倉澤 ご紹介をいただきました倉澤です。いま豊泉委員長から40数年前、ほぼ半世紀近い前に会ってからのおつきあいというお話がありましたけれども、慶應義塾大学の法学部では1、2年生は教養課程の講義が日吉であって、3年生で三田へ来て専門科目の講義を受けるわけです。僕は豊泉君が三田に来たちょうどそのときに駆け出しの教師として、専門科目として初めて手形法の講義をした年でしたので非常に緊張していました。世間ではよく「マスプロ教育」なんていうけれども、教室にいくら人数がいたって、豊泉君のことはもう初めからよく知っていたんです。というのは、よく彼は質問に来るんですけども、

今にして思えば何か分からないことを質問しに来たんじゃなくて、大学院生に毛が生えたような新米教師を試してやろうと思って毎日来たんじゃないかと思っております。

その豊泉君がさきほど、今いろいろと問題になっている新しい制度の下でのロースクールの本来のあり方について非常に明解なお話をしてくださいました。これは豊泉君の才能かもしれませんが、先ほどのお話もやっぱり三田法学の道の一つだとも思います。そんなことで、今日限られた時間であまりまとまらない話になるかもしれませんが、できるだけお手元に差し上げてあるレジュメに沿って、この三田法学の道についての僕の考えを申し上げたいと思います。

法学の道

まず「解題」とありまして、「法学は法の真義・正理の解明を目的とする人間の営為」と書きました。つまり、法というものは、こうと決められれば決められたものとして社会に存在するわけですが、法学のほうは、これは人の営みですから、人が日々生きている限りは常に営まれるものです。

それから「道」です。目的に到達するために先人が開き、踏み固めてきた営みの過程・方法という意味です。ただ、道というものにもいろいろありまして、例えば、高速道路なんていうのは、出発点から到達点にできるだけ早く着くようになんていって、航空写真でもって線を引いて「トンネルを造れ、橋を造れ、それから、その辺で畑をつくっている人間から全部土地を買い取ってしまえ」というようなことを言って造る道なのでして、それまで誰も走ったことがないところに初めて車が走るというような道ですね。そういう道として法学を考える人も、いないわけじゃありません。

けれども、僕のここで言う道というのは、もともと荒地だったところを誰か前の人が踏んで固めた。そして、その道をまた次の人がまた歩いた。それから、その道を行きながら、また1人それる人が出てきて、それをそれる人たちもまたその跡を踏み固めた。そういう人が踏み固めてきた道という意味が、こ

こでいう道なわけです。目的に到達するためというのは、高速道路もそうかもしれないかもしれませんが、われわれにとって人間の営為として自分に対してなにがしかの力、あるいは、勇気を与えてくれるものというものは、荒れ地を開いた先人たちの踏み固めた志を知ることです。

三田法学

それから、法概念と概念法学という主題のほうについては、まだ触れません。後で触れます。もう一つは、法学と道のほかに「三田法学」と書いてあります。これは、豊泉先生がもうすでに解題してくれたことですが、三田法学なんていう学問があるわけではありません。茶道や華道みたいに何々流なんていうのがあって、それは流派ごとに展覧会を開いて、その流派の美の一つの基準みたいなものも世の中にはある。それは家元の金庫か何かに奥深くにいわゆる家伝として伝えるようなものでしょうけれども、そういう意味での三田法学なんてものはありません。

まさにこの三田法学というのは、三田で学んだ人たちの歩いた道というわけで、それは非常に幸いなことに慶應義塾の建学者、ファウンダーの福澤諭吉という人からなんです。福澤というのは変な人でして、『福翁自伝』——おそらく日本の国語で文章を書いて文章の美学が成り立つかどうかという実験として成功した最初の口語の日本語の文章だと思いますが——、この有名な本の中で幼少のときを語るのを読むと、殿様の名前が書いてある紙をうっかり踏んづけてしまったら「臣下の道に外れるじゃないか」とお兄さんにえらく怒られた、でもそうはいうけれども殿様の頭を踏んづけたわけでもあるまいしと、誰もいないところで紙切れを踏んでみたり手洗いにもっていったりしてみた。そして、別に何ともなかった、というようなエピソードを書いてあるわけですね。

先ほど豊泉委員長の話の中で、通説・判例というものを既成概念として覚えるということは法律学の正しい勉強の仕方ではあり得ないと言われたのです。今日これから話しますが、通説も一つの偏見ではないか、間違った考えじゃないのではなからうかと怪しんでみるということが必要だということです。

今日の話でこれから出てきます津田利治先生という先生の『会社法の大意』という上下版の初版の序文に「通説もまた一つの偏見にほかならず」というようなことを書いておられた。これをもっとしゃれて言いますと、メンデルの法則のメンデルは修道士だったそうですが、彼が遺伝学を出したときに、修道士のくせに神を否定するのかと世間から非人間的に扱われるほどの非難を受けた。そうしたならば、メンデルの言葉が有名な言葉として残っていますね。「見ていてごらん。今に僕の時代がきつと来る」と、こう言ったというのです。これと同じなのです。通説といったものも「ある時代の」という括弧付きの偏見にほかならずというわけです。

概念法学

これが「1 解題」でして、そして、次に「2 概念法学」というわけですが、けれども、レジュメを見てください。かぎ括弧を付けた「概念法学」というコトバの特殊性とあるところです。ここで、その後でかぎ括弧で引用しているのは『広辞苑』の第4版の425ページに書いてある文章でして、「概念法学」というコトバは辞書にも上がっているわけです。ここでの引用は第4版ですが今は第6版が出ているんですな。国語辞典としての『広辞苑』は、第4版で終わりになったんじゃないかというのが僕の考えで、あとは『現代用語の基礎知識』なんていうのと競争するような時代になってきちゃった。辞典ってそういうものではなからうと僕は思うのですが、いずれにしても第4版を読みますと、「制定法の無欠陥性と論理的完結性とを前提として、形式論理による法の体系的構成と適用とを重視する法学。イェーリングが19世紀のドイツ法学を批判するのに用いた語」と書いている。

要するに、20世紀初頭にイェーリングが19世紀の法律学を批判するときに「概念法学」という言葉を使った。ここでかぎ括弧を付けているのは、まさにその「概念法学」という用語なわけです。

「概念法学」の歴史性

その後レジュメに「コトバの持つ意義の歴史性とその機能。概念の固有の意義との対比」と書いてありますけれども、この「概念法学」とかぎ括弧付きでいう、今日も使われるコトバは非常に意義のある、しかも歴史的相対性のある言葉なのです。何かといいますと19世紀は「法は法だ」という法実証主義の全盛時代なのです。法律学の既修者の諸君はどこかですでに習われたでしょうけれども、ドイツでは法典論争というのが19世紀の初頭、1810年代に起こります。

フランス革命とナポレオン法典

それより少し先の1789年にフランスで大革命が起こっていて、この大革命そのものは、革命としてはブルボン王朝を倒して成功したように見えながら、その後の暗黒時代を経て、気が付いたらナポレオン1世という皇帝が生まれたのだから、実は失敗みたいなものかもしれませんが、歴史的に非常に大きな意義があるのは、そのナポレオンがナポレオン法典を生み出したことです。コード・シヴィルは「フランス人の市民の法典 (Code civil des Français)」とあって、1804年につくられたものですが、ナポレオンの名を冠してコード・ナポレオン (Code Napoléon) とも呼ばれます。

そのくらいナポレオンが、——今日は限られた時間なので、多分こんな話で終わっちゃうのかもしれませんが——世界制覇を夢見て、半ば成功したところが最初つかまっちゃって、地中海のエルバ島というところへ流された。そこから脱出しまして、再び復活してまたヨーロッパの征服を始める。やがてベルギーのワーテルローでウェリントンの軍隊に負けて「地中海なんか閉じ込めると、またあいつ出てくるから」というので、今度は大西洋の孤島のセントヘレナ島というところへ流されて、そこで死ぬわけですね。これは、ちゃんとした文献が残っておりますけれども、そのナポレオンが死ぬときに「自分の征服した版図は一時の夢だったけれども、自分の作った法典は未来永劫のこるであろう」と言って死んだというんですね。

ナポレオンの矜持

近代市民法典が19世紀の初頭ナポレオンによってフランスでつくられる。ナポレオンの豪語したのは間違いじゃなかった。全世界の市民法典のモデルになりました。『六法』をいま持っている人は、民法の現在の3条、これが第二次大戦の敗戦後に1条ノ3に繰り下がるまでは1条だったのですが、最近の民法の改正で第3条になって「私権の享有は、出生に始まる」と書いてある。これは人間が権利主体、つまり権利の持ち主になるということの時期を決めているだけじゃないんですね。人は生まれながらみんな権利の持ち主であるという意味なのです。出生しない人はいないのですから。

要するにオギャーと生まれたら人は全部平等に私権の持ち主である。その前の時代までは、殿様の子どもというのは次の殿様として生まれる。商人の子は商人として生まれる。逆に、商人じゃない人の子どもは、商人としての特権は得られない。こういった前近代までの法には慣習法や教会法が多いわけですが、日本でいえば武家の御法度といったものがそうです。武家の御法度というのは、侍しか権利の主体として認めない。ところが、近代になると母さんの胎内からオギャーと生まれればみんな私権の主体になるというのがナポレオン法典の8条でして、もちろん日本の民法と文章そのものは違いますよ。「すべてのフランス人は私権を享有する」というのです。ですけれどもその趣旨はまったく同じです。

不平等条約改正と法典編纂

日本で不平等条約改正のために文明化された民法というものを作らなければ平等の条約にならない。それはそうなのですね。日本が開港をして、それで諸外国と最初に条約を結ぶ。いわゆる安政の不平等条約ですね。不平等条約の最も不平等なものは治外法権の権利です。外国の居留民というものに対して、日本に居留を認めるけれども、治外法権を与える。治外法権って変な言葉ですが、原語のほうが分かりやすく、エクストラテリトリアリテ (extraterritorialité) です。エクストラextraは、外という意味で、テリトリアリテterritorialitéとい

うのは、テリトリー、領土の中にいるということを抽象語化した言葉です。外国人は横浜という日本の領土にいても、日本の領土の外にいる資格があるという意味でして、僕が直訳するとすれば、「領土外資格」と訳します。ですが、もう治外法権って言葉が出来上がっているんですから、それをいまいった意味として解すればいいんですけれどもね。要するに、横浜でアメリカの居留民が、日本人の商店から泥棒をしたり、日本人を殺したりしても、日本に裁判権はありませんということになる。なぜかというと、日本にいないという、日本の領土の外だという資格を持っているからというわけです。こんなのは不平等たるもいところですよ。

そんな不平等条約を結んだ井伊直弼は、安政7年、1860年に桜田門外の変で殺されてしまうんですが、あの安政時代に、歴史的な流れとして開国をしなければならない。外国人を受け入れて、そして、日本のそのままの状態で外国人を受け入れたらば、不平等条約にならざるをえない。なぜかというと、外国のほうで「結構です。じゃあ、日本の領土にいるアメリカ人に、日本で裁判をしてくださって結構ですが、裁判だから、何か法律に従って裁くんじゃ。では何法で裁きますか？」と聞かれたときに、武家の御法度で裁くとか、商家の御法度で裁くなかっていったって、そんなの通用するわけがないんですよ。そうすると、要するに、もちろん種類は違いますけれども、文明の程度として同じレベルの裁判の準則、法を持たなければ、平等条約なんて成り立つわけがない。それで、一生懸命条約改正のために鹿鳴館外交などといって、日本の文明開化を謳歌しようとした中で最も基本的なものが民法の制定です。明治31年に今の3条を1条として「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」という民法を施行して、明治32年に治外法権を撤廃する条約改正が発効します。

要するに、ナポレオンの豪語はそのとおりだったという話なのです。彼の法典は日本の法律のモデルとして、日本の近代化というものを推し進める役を果たした。それと同じようなことが、当時西ヨーロッパにおける日本と同じような後進国のドイツで起こった。近代に後れてきた「青年」は、西ヨーロッパではドイツ、東洋では日本ですね。

ドイツの法典論争

ドイツではゲルマンの慣習法、あの黒い森の中で狩猟で暮らしていた人たちの間に生まれた慣習法というようなものについて、やっぱり日本と全く同じように法の近代化を図ろうとして、普通民法典をつくろうとした。普通民法典の「普通」とはドイツ語のアルゲマイネ（Allgemeine）ですが、これを「普通」と日本語で訳します。「普通」というのは何かというと「共通」という意味です。原則的なものというわけですな。それまで各地の各領地ごとに、あるいは、各職業ごとに民法が違っていた。日本と同じように武家の御法度と商家の御法度が違うように違っていたものについて、共通の市民法というわけで「普通」という言葉を使うわけですね。

その普通民法典をつくるについては、さっきのナポレオンのフランス民法典というのがすでにあるわけです。これをつくったナポレオン自身が影響を受けたように、フランス民法はもともと近代自然法思想の子です。ここで特に「近代」と付けなきゃいけないのは、自然法思想というのは、もともとカトリックの考え方で、トマス・アクィナスによって確立された考え方であるわけです。つまり神様の宇宙の支配の原理というものが人間の理性に反映してきて、それによって人のあるべき道を照らすというような意味で自然法という言葉が使われたのが、近代の自然法学では神様の意思なんていうのは取っ払っちゃって、人間の正義感とか合理性といったような人間の本性が自然法であるというふうに転換したために「近代」と付けなきゃいけない。カトリックの神を切り離れた自然法という意味ですから、近代自然法というのを常に付けなきゃいけないですな。

そういったように「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」から貫いていくこのフランス民法典の考え方というのは、もう人間の本性、自然の性質というものに即した、そういう法律であるというわけです。だとしたならば、フランス人も人間だし、ドイツ人も人間だというわけで、人間の本性に即したというならば、それじゃあ、フランス人の本性に即しているならば、ドイツ人の本性にも即しているだろうとあって、そして、ナポレオン法典をモデルとして普通民法典をつ

くろうという、のちの日本の明治民法の制定と同じような動きが1810年代のドイツで起こった。そうしたら、ものすごい大反対がドイツで起こりまして、ナポレオンがまだベルリンを占領していたときのドイツ・ロマン派の思想家でフィヒテなんていうのは「ドイツ人に告ぐ」と言って「ナポレオンに踏みつけられたけども、他のゲルマン人よりもドイツ人のほうが優越している、正しい国民教育をすればフランスになんて負けないんだ」と、まさにロマン派ですね。そういう状況の中で、ナポレオン法典、コード・ナポレオンなんて名前の付いたものをモデルにして、それをドイツの普通法にするなんてことに反対の思想が出てきて、それが勝つんです。

歴史法学派——法実証主義の登場

ところが、勝つといってもいずれは近代的な法典が必要なんですな。それをサヴィニーという人が主唱する歴史法学派というのが「人間はおんなじだ。ドイツ人もフランス人も人間はおんなじだというけれども、それじゃ、なぜフランス語とドイツ語って違うんだ」と、こういうんですよ。「人間は人間としておんなじだといったって、全然コミュニケーションに共通性がないじゃないか。ドイツには、ドイツの人間の自然のあり方というものがあるんだ」といって、それでそういう主張をしたために、じゃあ、ドイツでは何が法の素材になるかといって、中世のドイツに伝わったローマ法というものを歴史の中から拾い出すという作業を始めました。

フランスでは新しい近代的な法律を作る、立法するというのはきわめて理念的な作業で、人間の本性とは何か、人間の正義とは何か、といったことから作るのに対して、人間のそういう理念じゃなくて、今までドイツ人はどうやってドイツ人が助け合い、あるいは、ドイツ人が人間らしく生きようになってきたかという規範を、これをつくるんじゃなくて発見するというのです。つまりは哲学に対する科学として、この法律学をやるというわけです。要するに、すでにあるべき法は隠れてあるんだ、われわれが見つけてないだけだ。ドイツ人は、ちゃんと今まで民族の誇りを持って、自らの法にもとづいて生きてきた。

ただし、それがその中に近代市民のあり方としてきちんと発見されていないものもある。間違っで見られてきたものもある。法学の問題とは、そういう規範の発見と評価についての科学だということですから、歴史法学派というのは、法についての歴史的な実証主義、法実証主義ということです。

そうすると、さっきみた『広辞苑』の「概念法学」に書いてあるように、この法律というものには欠陥がない。われわれが発見しないと、欠陥があるように見えるけれども、法律ってというのは室の山に隠れて、ちゃんと全部そろってる。それを実証的に歴史法学者なんか拾い集めて文章にしたものを、ドイツの制定法にするべきだ。それを普通ドイツ民法典と呼ぶべきだということです。制定法としてつくられた暁には、もう歴史的に検証を経ているからならない。ドイツ人にとって、人間としてもうすでに正しい慣習の中で出来上がってきた規範を集めたものが新しくできるこの民法典という本に書いてあるものだ、本は新しいけれども、中身はドイツの長い歴史の中でドイツの民族性の堆積としてあったものを、ちゃんとサビニー先生以下が発見した事柄が書いてあるということじゃないとだめだ、そうでなくちゃいけないんだ、というわけです。

そうすると、実証的に「法は法だ」ということになる。ある法律について、その法がいいか悪いかは問題にならない。法が法として歴史的に民族精神を形成してきた以上は、もうそれは正しいんだ。そうすると、現代の「通説・判例」じゃありませんけれども、実証主義的に編さんされたドイツ民法典なんていうものは、それをもう欠陥がないものとして裁判の基準としては、すでに発見されて、法典に書き込まれた概念というものを前提とする。これに対しては、19世紀の半ばにはドイツでは法学無用論なんていうのが出てくるくらいで、キルヒマンなんていう人が「法解釈なんていうのは、科学じゃありません、単なる知識です」と言い出した。

「概念法学」の機能——法的安定性

このレジюмеで「概念法学の歴史性とその機能」と言ううちの、概念法学という言葉のもつ歴史性、歴史的な意味がいまの話です。何か「概念」と「法学」

という言葉にくっつけて理屈で考えちゃ駄目なんです。これは19世紀に「概念法学」という言葉がどういう考え方の批判の道具として使われていたか、という約束ごとですからね。

ではレジュメで「概念法学の機能」と言っ、それはどういう役割を果たしたかという、社会の現状維持です。法は法である、もう歴史的に出来上がった法はドイツ人にとって中世ローマ法やゲルマンの慣習法というのは、存在するだけでも正しいんだ。それをきちんと集めれば制定法である。そうすると、いいか悪いかなんて言っちゃいけないんであって、それをちゃんと発見するかどうかの問題だというわけですね。

そうすると、法によっては社会は変わらないんですよ。変わらないということが非常に当時歓迎された。というのは、19世紀というのは、もうほぼ100年を通じて産業革命の時代で、ヨーロッパが非常に経済的に豊かになった時代なんです。どんどん人々の暮らしが豊かになっていく。そうすると、暮らしの豊かさを支える権利義務の体系なんていうものは、へたに動かされちゃ困るので概念法学が保守的な機能を果たす。

ところが、やがてマルクスの弁証法が登場しますね。それまで豊かさをつくり上げてきた制度が、その後機械文明の発達とか、資本主義の発達に伴って、今度はそれが障害になってきちゃうんですな。

そして、ドイツの19世紀的現状維持的、現状固定的な概念法学、あるいは、ドイツの法典に書かれた概念をたくさん知っていて、コンピューターとおんなじで、ある事件をインプットすればおなじ答えがアウトプットされるというような仕組みというものが、もう19世紀末には今度は逆にドイツの文明の発展を阻害する要因になってくる。

それで、19世紀の後半の1872年に、イェーリングが「権利のための闘い」という名講演を本にして出した。今日のテーマにそれが少しもじられているんですがね。「権利のための闘い」ということを言っ、本来法というものは、ある目的というものを達成するための手段である。そうだとすると、目的というものが歴史的に相対化されているとすれば、今ある法律がずうっと欠陥がない

なんていうことはあり得ない。法は目的に向かって闘いによりつくり出されるものであって、すでにあるものを発見することではない、というのが、このイエーリングの目的法学派というわけです。『権利のための闘争』という本は読んだ人もだいぶいるでしょう。

これが「概念法学の持つ意義の歴史性とその機能」です。このドイツの19世紀の概念法学の持っている、何ていいますか、人々の権利義務の紛争が、通説・判例というか、書かれた法によって機械的に裁かれるということは、100%マイナスとも言えないのは、逆に一つの持っている法律の理念である法的安定性というものには役に立つという面があって、したがって、それは資本主義の発展の下支えをずっとしてきたわけですね。ですがやがてこの問題、つまり、法は理念に基づいて、立法され、創造され、解釈されるべきか、というのが大きな問題になってくる。それに対して、法的安定性の要請がある。人々に「法を守れ」というときに、「なぜ守るのか」というと、「紛争があったときに、法を守った人が勝ち、法を破った人が負けというシステムだから」というわけですよ。「じゃあ、われわれには望ましいことじゃないけれども、後々紛争が起こるなら、勝つために今のうち法を守ろう」と言っている人が「じゃあ、何を守るか」というときに、「さあ、それはそのときになってみないと分かりません」と言われたんじゃ、何を守っていいか分かんないですよ。コンプライアンスっていったって、何にコンプライするのか。それが法的安定性という問題ですね。

今日のこの話のテーマが「法概念のための、概念法学との闘い」というその概念法学というのは、そういうふうに歴史的な一つの出来上がった学派、スクールに対する批判的な言葉だというわけです。

「概念」の意味

これに対して、「概念」というのは概念として哲学的な意味があるわけで、『広辞苑』の第4版でも、概念についてはこういうふうに言っている。「事物の本質をとらえる思考の形式。事物の本質的な特徴とそれらの連関が概念の内容(内包)。概念は同一本質をもつ一定範囲の事物(外延)に適用されるから一般性

をもつ」。つまり、事物の本質にもとづいて派生的に出てくるものが概念の内容で、「内包」といいますな。これに対して、他の概念との区別ですが、例えば似ているようだけれども、これは藍ではなくて青である、という場合です。この藍と青との区別なんていうのが「外延」です。その概念の及ぶ範囲ですが、これをはっきりさせなきゃいけませんというわけです。

「売買契約」として締結されている契約があったとして、書類には「売買契約書」って書いてある。だけど、本当に売買契約であるのかないのかというのを決めるのは、売買契約の特質、本質と属性を備えているかどうかです。人々は売買契約書なんて名乗ってはいても、すでにそれは売買契約の本質、属性の範囲というものを超えている、人々は間違っって売買契約書なんて言っているけれども、実はこれは交換契約書であるというようなことが、概念の果たす役割です。これは、本質と属性というものにより成り立っていて他との区別を明確にするという役割をもつものです。

そもそも学問あるいは科学というのは、他との区別ですね。科学の「科」って、セクションのことですね。病院に行っって、内科、外科、何々科ということですね。科に分ける。その科を間違えてたら、えらいことになっちゃうんですから。

したがって、正しい概念であるとするれば、それはもうこれはあらゆる事物について、事柄あるいはものについて一般性や普通性をもつ。Allgemeineになる。そうすると、法概念というのは、法について一般性を持つわけです。例えば、売買契約ならば、こういう本質とこういう属性がある。これを超えてしまったならば、あるいは、こんな性質が付け加わるとそれはもう他の契約として区別されるといったようなことが、別に売買契約に限らず、あらゆるものについて一般性を持つというわけです。

三田法学の道

今日の表題については、もうこれで解題は全部終わりなのでして、その「法概念のための、概念法学との闘い」というのが「三田法学の道」であるという

のが僕の結論部分です。ただ、ここから先、三田法学の道というのは、先人たちが踏み固めたものといってきた、先人たちについての評価は、僕は自分の専門である商法以外でできません。

ことに先ほど豊泉委員長から僕の過分な紹介があったけれども、一番先に専門科目を持ったのは手形法でした。しかも手形法というのは、法概念として非常にとらえやすいんですね。というのが、近代市民法が「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」といって始まる近代市民法というものは、人間平等だといって、それで近代市民法の三大原則、これは未修者の人にとっては初めてかもしれませんが、これは重要なことで、何回でも聞いてください。まず意思自治の原則、過失責任の原則、所有権絶対の原則です。これは、ある意味でいうと横並びに1、2、3じゃなくて、一種の段階みたいなものですね。基本は、意思自治です。

意思自治の原則

人間が不平等なときには「契約で合意した」なんて言ったって、力のある人間の意思が通ったことに過ぎないじゃないかというわけですが、平等な人間二人が合意をしたとすれば、二人にとってそれは自分の意思に基づく結果である。このごろの言葉でいうと、自己責任なんていいますけれどね。それは、人間の平等性というものを前提として、地位の、あるいは、主体性としての平等ですよ。この意思自治の原則にもとづいてさっき問題にいった法的安定性の問題があって、人と人とは、例えば、僕のやってる商法学でいうと、きわめて鋭い利害の対立の状態の中でその利害の接点として商法という法律が社会的な役割をはたしている。

「利害の対立」と「敵対」

注意しておきますと、利害の対立なんて、何か最近の世の中みたいに、親子で殺し合ったりなんていうことを商法学者が昔から教えてたのかというと決してそうじゃないですよ。これから法学をやる人に限らず、学問をやるという人、科学をやるという人たちは、——これはマックス・ウェーバーの受け売

りですが、価値からの自由Wertfreiheitということを知る必要がある。まず事実を見て、価値はその次に判断する。

例えば、利害の対立はよくないなんていうことで、ものを考えちゃいけない。実は売買契約というのは、売り手はできるだけ高く売りたいんですよ。買い手はできるだけ安く買いたいです。利害が違うところから出発して、それで最後に合意点に達して、それがお互いに納得できるものであるような合意点を求める。そして、「ああ、今日はおかげさまで、いい買い物がありました」「いや、今日はおかげさまで儲けさせていただきました」と言って、売り主と買い主が笑って握手して別れるような状態で契約を結ばないと、後々もう人々は取引が続けられなくなります。信頼が置けなくなる。

だけれども、一方は高く売りたい。他方は安く買いたいたいという状態というのは、人々が笑って握手したから、あの買い手は高く買いたい人だとか、あの売り手は安く売りたい人だなんて、そんなふうに考えちゃったらば、もう科学としての売買契約の判断はできなくなる。

これに対して敵対という言葉があります。これは、もう相手憎しという感情がある言葉なんです。売買契約は仲のいい八百屋さんに行って、八百屋のおじさんと冗談言って、今日も和やかに買い物を買うんです。だけれども、利害の対立があるというのは、それがこの相手が嫌なやつだとか、憎いとか、悪者だとかいったような価値感から自由なところから見ると事実としてそうなっているんです。人間はもちろん法によってのみ生きるものではないから、むしろ法なんて無きに如かざるもので、悲しいかな、当事者間で正義が食い違ってしまったら最後まで紛争が終わらない。最後まで紛争が終わらないとどうなるかという、力のあるほうが勝ちになっちゃうといけないから裁判をするわけですけれども、もともとはそんなことが起こらないことが望みなのです。法は無きに如かざるものなんです。法律万能主義っていうのは、法学の一番の敵です。ドイツの19世紀の概念法学は、その意味でも問題があるわけですね。

過失責任の原則

それから過失責任というのは、事後に損害賠償責任というものが不意打ちで課せられるとしたならば、われわれは意思による自治っていったって、自治的な行動の方向が分からなくなる。意思自治によってこういう行動を起こすというときに、後で損害賠償責任なんて負わない方向はどちらですかと決めといてもらわないといけない。行動のスタートにあたって、通常人の尽くすべき注意義務を尽くしておけば、結果として他人に損害が起こったとしても、損害賠償責任が負わされるってことはない。

昔は、殿様のご機嫌次第でもって、罰金なんて取られたり、すぐ牢屋へ入れられたりしちゃうんだけど、われわれは尽くすべき注意を尽くさないで行動した人は、ある意味でいえば、賠償責任を想定しておいて、ただ、損害が実際に起こらないでほしいと祈ってるほかない。

これに対して、尽くすべき注意を尽くしておけば、無過失な人は後で責任を負わされることがないというのは何かというと、行動のスタートのときに責任を予測できるというような法的安定性ということになるわけですね。ただそれが現在ではもう通じない時代にもなってきてはいるんですよ。

この中でも自動車を運転する人がいるでしょうけれども、自動車損害賠償保障法なんていう昭和30年にできた法律なんかですと、もうそういう近代市民法の原則が崩れている。あるいは、さらに平成になってできた製造物責任法つまり製造者のプロダクト・ライヤビリティーを決める法なんていうのは、もう行動のスタートのときに、人が主観的にどういうことをやったかなんてことを判断しない。引き渡されたものに欠陥があったら責任を負うといったような、そんな時代に移ってきているんですが、今の話は、近代ではなくて、社会の中から現代化という問題が起こってきて、現代の概念法学というのが出てきているという心配の話です。

所有権絶対の原則

意思自治の原則できちんと合意をして、そして、尽くすべき注意を尽くして、

そして、自分の知恵と才覚によって得たものの所有権は国家権力という唯一の近代ナショナリズム、——昔は中世のときのカトリック教会とか領主など中間に権力的な財産の篡奪者がいたわけですが、唯一の国家権力というものは、もうこの意思自治の原理と過失責任主義の原理に基づいて、ある人が知恵で稼いだものというものは、今度は国家は触れませんという形で、資本主義の拡大再生産がドーッと続いてくるというわけですね。この所有権絶対も、また現代で揺らいできている。土地の強制収容なんてことが、またまた行われるようになる時代にもなってきた。

法律要件

話を戻しまして、われわれはこの世の中でいろいろな事象にぶつかる。あるいは、自分の行動にしてもいろいろな行動をする。そのときに法というものについて一つの共通の、『広辞苑』でいう一般性をもつ概念というものがとらえられれば、これはもう非常に世の中にとって、法学そのものが役に立つというわけですね。司法試験に役に立つとか、そんなことじゃないですよ。あるいは儲けるのに役に立つというんじゃないくて、人々の人間らしい生き方を支えるってわけですね。

まず考えるべきものは、法概念の一番大きなコスモスの一つである法律要件です。世の中をみるときにひとつの、法律の銀河系と言ってもいい。事物の本質をとらえる思考形式として、まず法律要件という概念でもってとらえる。この法律要件というのは、これは法律効果の必要条件ですね。ある法律効果として権利義務が発生し、変動し、あるいは消滅する。刑罰が科せられるとか、あるいは、所得税が課税されるとか、いろんな法律効果の発生する必要条件という事物のコスモスです。この中には、いろんなものがあります。

例えば、犯罪という事物は、刑罰という法律効果の要件になりますね。刑法学では構成要件なんていったりしますけれども、これも法律要件です。あるいは所得を得る、つまり儲けるという事実は所得税の課税の法律要件になる。税金の納付という義務、国家から見れば課税権という権利義務の法律要件である。

個人対個人の問題では、例えば、不法行為というのは近代の原則としては、現在ではちょっと違ってきましたが、近代の原則としては過失の有無と、それから、損害との因果関係が被害者に対する加害者の損害賠償責任という法律効果の法律要件です。

こういうたくさんの、あるいは、現代の法治主義社会では、ほとんどのわれわれの一挙手一投足が法律要件を構成するかもしれない。ただし、あの人が好きだとか、あのバラが欲しいとかいうのが、内心の効果である間は法律要件になりません。社会的規範として社会的アクションになると、ほとんどすべて法律要件だといってもいいかもしれない。

法律行為

その中に際立った一つの、他と区別される共通の本質を持った法律要件の一群があります。それが「法律行為」というミニコスモスですね。法律要件の中の一部、全体集合に対する部分集合として、法律行為というものがある。その共通性、内包は何かというと、当事者の意思表示です。法律行為は意思表示を要素とする法律要件というわけです。

例えば、売買契約という契約は、売主に商品の引き渡し義務と代金請求権という権利義務を発生させ、買主に代金支払義務と商品の引渡請求権という権利義務を発生させる、そういう要件ですが、そこでは人々の「売りましょう」「買いましょう」という合意、契約というものが要素になっている。

これに対して犯罪は「刑罰を受けましょう」とか、所得は「税金を払いたいです」とか、そういったような意思表示をしないんですよ。税金なんて払いたくないんですよ。刑罰だって受けたくないんです。

さらに法律行為を他の法律要件と区別する、外延を画するのは、意に反した法律効果ではないということです。これはとても大きな近代史に起こった出来事、エポックメイキングなことなんですな。というのは、前近代までは、人々は義務を中心としてオキテというものをとらえてきた。その義務というのは、常に必ずお上の意思によって意に反して課せられた。ところが、近代市民法は

「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」といって、生まれた人間が権利の主体ですよというわけです。権利の持ち主なんだ、だから、割り当てられたものじゃないんだということになって、自分たちが主体的に法律効果を決めるという領域が生じた。

売買契約において、買主が代金支払義務を負うのは、意に反してじゃないんですよ。自分が「100円払いますから、このパンを1個ください」と、こう言ったからです。これに対して犯罪に対する法律効果である刑罰とか、所得に対する法律効果である納税義務とか、不法行為、自動車の人身事故なんかにおける運転者の損害賠償義務とかいうものは、全部意に反して法律効果を享受しなければならない。

そういう意味でいうと、前近代のオキテと、その点の本質は同じものが法律要件として今日の社会でもたくさんあります。現代はまた増えてきたんです。「役所は、どうしてもっと行政規制をしないんだ、制裁をしないんだ」なんて国民が言うんですからね。それは、現代、いわゆるポストモダンの特徴かもしれませんが、そんなこと簡単に言っちゃいかんですな。

民法の意思表示

法概念というものがきちんとしたことによって、われわれ大きな学問的な知的財産を共有します。『六法』を持っている人は、民法の90条以下を見てください。そこに民法第1編総則の第5章法律行為とあって、法律行為というものについて特に第2節の93条以下、意思表示について、どういう場合に意思表示がどういう法律的な力を発揮するかということを書いてある。ということは何かというと、売買契約の意思表示においてとか、賃貸借契約の意思表示においてなんていう規定を置いたらば、この法律何万条になったって足りやしないですよ。契約の種類ってというのは、典型契約、つまり、民法で通常使われるものとして定められているものだけでも13種類です。ましてや契約自由の原則で、無名契約もあるんですから実際にはもっとずっと多い。ところが、それが共通の本質、一般的に適用される共通の本質ないしは属性というものでくられる

と、もうそんなの一张张々に考えなくていいですよ。ここで意思表示として共通に考えて置いて、あとずうっと後ろのほう行くと、債権各論なんていうところで、売買そのほかの契約の規定が出て来るんですけども、すべての契約について意思表示は済みですから、そんなことぬきに個別的な規定が始まるんですね。

法律行為については、ことに未修者の人に注意すると、この黒板に書いてある意思のシの字は「思」なんです。「志」じゃありません。志っていうのは「山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ」というわれわれの達したい目標なんです。でもやがて「噫、われひとと尋めゆきて、涙さしぐみ、かへりきぬ山のあなたになほ遠く「幸」住むと人のいふ」というカール・ブッセの詩に、上田敏の名訳をつけたというこの詩のように、いつも挫折するんですな。

売買契約で昼飯のパンが買いたいという、そんなものは志でもって挫折しちゃったら大変ですよ。これはそうじゃないんです。これを100円の貨幣と等価交換をしたいという思考内容だから「思」のほうですよ。こういうことを法律の試験やレポートなんかについて言うに「何だこの細かいことは」なんて思うかもしれませんが、この場合には、例えば、打つべき点がさんずいじゃなくてにすいだったとか、心というときの点が足りないといった、そういうミスと違うんですからね。全然違った意味になっちゃうんですから。

手形行為

この意思表示の中にさらにもう一つ、今度は法律行為をマクロコスモスとしてとらえたときに、その中にミクロコスモスとして「手形行為」というものがとらえられるか。くどいですが、とらえられるかというのは、ここの中に集まってくるものには共通の本質があって、しかもそれはこっちにはないというような概念をとらえられるか、ということです。

この手形行為というものがとらえられれば、手形上の法律要件もたくさんあるんですが、約束手形を振り出すとか、あるいは、裏書するといった言葉、あるいは、支払のために小切手を振り出して、といった言葉が出てきて、そこに

共通の本質を持つてはいるが、しかし、他の法律行為にはない特質があるなんてことが明らかになるわけなんですな。

意思表示を要素とするという点は、法律行為のマクロコスモスの中でのミクロコスモスですから、なきゃ困るんですよ。

そのときに手形行為については、手形法という法律——手形法というのは、ことに為替手形っていうのは貿易の決済手段として世界中を飛び回りますから、珍しい世界法なんですね。1930年のジュネーブ手形法統一条約でもって、ヨーロッパ大陸の国と日本なんかが同じ法律を使っている——その手形法というものには、個別的な手形上の意思表示、つまり、各種の手形行為というものについて規定はあるけれども、一つの共通の概念としての手形行為というものについては規定がないので、これをどうとらえるかということは理論の役割になる。

理論の役割といったところで、一つのカテゴリーとして成り立たないのかもしれないけれども、成り立ったら便利ですね。さっきの民法93条以下とおんなじようなことが、今度は手形についての各種の法律行為についてとらえられるからです。この先はどうかこの法科大学院の先生方のお話を聞いてください。

手形理論と概念法学

そして半世紀前に僕の受けたショックの話です。

津田利治先生の『横槍 民法總論（法人ノ部）』という本がありまして、「手形理論は、当時の概念法学に育てられた華麗な徒花の一種と言ふべく……科学的虚像を形成し、今日では……其解釈法学的実務的価値を喪失した」というのです。

僕がこれから一生をかけて命懸けでやろう、手形理論をやろうと思っていたら、まだこの本が出るずっと前、原稿を見せてもらったときにこういう文章にぶつかったんですよ。そりゃもうびっくりしましたね。津田先生は僕といつとき道を同行した先達ですから、もう手形理論の概念というものをきちんとやらなきゃ駄目だなんて、こう言っているのかと思ったのですが、概念法学

のあだ花なんだという。でもそれは僕が誤読をしたんです。これがショックの正体です。レジュメに「私の誤読」と書いてありますね。

この文章は、後でこの『横槍 民法總論（法人ノ部）』という本の4ページをぜひ図書館でご覧になってみてください。レジュメのこの部分は、手形理論について三田法学の道をたどるガイドにするつもりで書いて、そのときに手形理論を取り上げるきっかけとするために文章をちょっといじったんです。

法人理論

実は、この津田先生の文章というのは法人の本質論についてのものだったのです。この世に法人というものがあります。さっきいったように「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」というんで、お母さんの胎内から出生した人間は、権利の主体性が認められているんですよ。そうすると、今度困ったことに、株式会社なんてものはお母さんの胎内から生まれたことがないですからね。産婦人科から何々会社が出てきた。そんなことないんですから。そうすると、権利の主体性がないということですから、そこで一定のものについては、今度は法人としてお母さんの胎内から出生したものに準ずるとした。準ずるんです。

「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」と言って、われわれ人間のことを法人と区別するために自然人とこう呼びますが、われわれは人類としてのヒトです。これは、もう無制限で権利の持ち主になるんですよ。

ところが、法人は法律の規定に従って、法律の定めた範囲内で権利主体性を持つという制度になっている。そのときに、ドイツ団体法思想というものにもとづいて、法人に自然人と同じようなものすごい大きな権利主体性を認める考え方として、法人の本質論として法人実在説、あるいは、法人有機体説といわれる考え方が唱えられた。

こういう考え方では、法人ってほんとに生まれたんだというのです。人間がお母さんの胎内から生まれて、人をつくるんだけれども、実はヘーゲルの哲学なんかで、個人というものは団体の中にアウフヘーベン、すなわち自分の主体性を揚棄して、初めて人間性を実現できるというような考え方で、法人という

ものが生まれたのだというのだから一種の哲学です。

それについて津田先生が「但彼の法人理論（法人本質論）の論争は、当時の概念法学に育てられた華麗な徒花の一種と言ふべく、商法学上の手形理論と共に科学的虚像の双頂を形成し、今日ではともに其解釈法学的実務的価値を喪失した。」と言っているうちの手形理論の部分だけをこっちへ持ってきたのです。

誤読だということが後で気がついたのは、当時の概念法学なんですが、実は、イエーリングも「概念法学」を19世紀のドイツ法学に対する言葉として使っている。まさにその意味での「概念法学」だと、津田先生は書かれていたのです。

津田先生は、1930年代にドイツに留学しました。ヒトラーと津田先生は、同じときにベルリンにいたんですよ。そこでは、この1937年にヒトラーはコード・ナポレオンのまねでもしたつもりなのか、ヒトラーの株式法という株式会社法を作ります。取締役は会社のフューラー、指導者だということですから小さなヒトラー。したがってこの取締役の義務というのは、まずもって国家と人民の共通の利益にかなうものでなければならない。現代の会社法では、あるいは、アメリカ流のコーポレート・ガバナンスの理論では、取締役が責任を負うのは株主だけじゃなく、従業員あるいは消費者といった人々になのだとこう言っているのに対して、1930年代当時の概念法学といってもいいでしょう。

青木徹二先生の交付契約説

手形法の理論というのは、青木徹二という先生が三田手形法学への最初の道をつけた。青木先生が、手形行為は契約の一種である交付契約だということを初めて日本で明らかにする。

これに対して、東京帝国大学の岡野敬次郎先生、松本烝治先生と続き鈴木竹雄先生に至るまで、手形行為というのは契約ではなくて単独行為だという説を立ててきた。なぜ立ててきたかという、契約だというと、手形を最初に振り出した人と受け取る人との間の合意が無効だと、手形が無効になっちゃう。ところが、完全に本物の署名、あるいは、記名捺印がある手形が世の中を輻輳流通していて、振出のときにそういう契約が最初の二人の間であったかなかった

かなんてことは分からないことだから、手形の流通の安全を害する。そこで、振出人がハンコをついたといったならば、もうそれで権利義務が発生するという単独行為説という考え方が出てくるんですね。

これはもう議論の進め方自体が間違いなんです。要するに、病理現象を原則化しようとしている。ここに原則があるといったならば、その原則には必ず例外が必要です。とくに、いま言ったような振出のハンコをついた人が、まだ受取人と合意する前の手形をかばんに入れいたら誰かに盗られちゃって、それが輾転流通したっていうのは、これは病理現象ですね。そういう例外について、振出人が自宅か事務所で手形にハンコをついたときにもう手形が世に生まれてきて、あとは善意取得の問題だ、なんて言ったならばむしろそっちのほうが原則論になってしまうんです。受取人に渡す前に盗まれる手形なんてこの世の中で例外中の例外なんですよ。

例外は厳格に解釈すべきなのであって、まず原則論です。そして、例外の場合には、有名な権利外観理論といったような例外の限界を画する理論によって、例外の場合に救済される範囲というものを決める。

ところが、単独行為説をとる人たちはこの例外を原則としてとらえれば、正しい法概念になるというふうに考えたんです。取引の安全というものを、原則の中で説明できるほうが正しい。そうすると、この余計なものが入ってきちゃうことのほかに、原則の持つ、通常のノーマルな人の意思にかなうといった本来の意味なんてものがなくなってしまうんじゃないか。

それから、話の途中でポツポツ言いましたけれども、近代の市民法学に対して、再び現代は何か形は変えて、あるいは、もちろんそういう時代になってきているからでしょうけれども、この概念法学化、例えば、例外的な弊害に対処するための公的規制といったようなものについて人々が歓迎の考え方を持ったりするというようなときに、現代的な概念法学とでもいうべきものが、それがあたかも正しい理論のような顔をしてひょっこり出てくることがあります。

三田法学の道というのは、何も今ある法の文章に固執して法解釈を理論的に厳密にやるというのが、この大学の法学なんじゃないんですよ。三田法学の道

は「概念法学との闘い」なんじゃないかというのが僕の考えです。およそ概念がいけないなんてことじゃなくて、正しい法概念というものがないと、概念法学との闘いをするときに敵の姿が見えなくなるじゃないかという、そういう意味なのです。

これでちょっと尻切れとんぼで、時間もしかも1分超過しちゃったんですけども、この結論が今日最初の豊泉委員長の話と合うことになりますので、無事にこのレジュメに掲げた話が終わったということにさせていただきます。

何か羊頭を掲げて狗肉を売るというのはこのことだということをいま自分でも実感していますけれどもお許してください。みなさん元気で頑張ってください。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

豊泉 どうもありがとうございました。予定の時間過ぎましたので、質疑応答は割愛してこれで終わらせていただきます。今日のお話について、何かもし疑問等がありましたら、一度は自分の心の中で反すうしてみてください。それでも分からないときには、私なり倉澤先生にどうぞお尋ねください。

それでは、今日はこれでおしまいにします。ありがとうございました。(拍手)

(日時：平成20年4月2日(水))